巻頭言

# 広島芸術学会十年、新たなはじまりに向けて

広島芸術学会代表委員
金田　晉

広島芸術学会は五年を刻んで成長してきた。一九八七年、私たちは「広島芸術学研究会」と名のって、この会を興した。日本の経済復興は世界の市場をリードするまでになり、それに合わせて文化的環境の創出の波が地方にも広がりつつあった。広島もまた国際平和都市として、美術館をもち、交響楽団を育て、伝統的あるいは前衛の工芸ジャンルを含めて、さまざまな創作活動がその裾野を広くひろげるにいたっていた。芸術の研究者も広島に次第に集まるようになっていた。そのような気運のなかで、創作する者、上演・演奏する者、研究する者、それらを享受する者、また芸術環境を育て、情報を送受信する者が集まり、「市民に開かれた」学会として、地味ではあっても理論の芽を育てる研究会を作ろう、これが最初の呼びかけの趣旨であった。研究会を重ね、その理論的成果の発表の場としての年報機関誌、会員の情報交換の場としての会報を定期的に発行してきた。

それから五年を経過した一九九二年、多種の活動の実績、会員数の増加、層の拡がり、広島以外に在住の会員の増加、法人会員の制度化という状況を受けて、私たちはこの組織の名称を「広島芸術学会」に変更した。それから五年目を迎える昨一九九六年、広島芸術学会は創立十周年を迎えるにあたって、自分たちの立つ位置を見定め、さらに将来に向けて新たなはじまりとなる節目をつくろうと考えた。私たちは委員会を中心に理論系と創作系のグループに分け、それぞれが自立的意味をもち、かつ相互に有機的に連携し合う企画を検討した。その中から二つの企画、「芸術――未来へ」を全体テーマとする研究公開の企画と、美術展覧会「十年の軌跡」が実現した。

第一の企画は、広島芸術学会第十回大会として、七月二十日と二十一日の二日間、広島市内中心部に位置する中国電力本社講堂で開催された。この学会は、芸術学をタイトルに掲げている。「芸術学」の思想は前世紀末どのような意思をもって誕生してきたのか、そして今世紀末を迎えてそれは何をおこない、何を課題としているのか、その総和と余剰を検討してみようと話し合った。私たちの考える芸術学は美術学と同義とする

狭義の芸術学でなく、美学、文芸学、美術史学、音楽学、都市設計学、建築学、デザイン学、服飾学、演劇学、舞踊学、映画学、写真論、工芸論等、きわめて多様多彩なジャンルを視野に入れる拡がりをもっている。それらの多くは今世紀になって、誕生したジャンルである。新しい素材が生まれ、新しいメディアが生まれ、新しい環境が生まれた。それらは資本の論理のもとでさまざまな商品の生産消費の修羅模様を描き出したが、しかし同時にそれは芸術的創造活動がそこに自己を投企する舞台でもあった。「芸術の原理は現実の美しい模倣ではなく、現実の生産である」と提唱したコンラート・フィードラーにはじまる芸術学の思想は、今世紀の基本的コンセプトであろう。第一の企画はこうした芸術学百年の問題性に、誕生の時期から今へとたどりなおす試みと現在的芸術状況からはじまりの意識をよび戻そうとする試みであった。

第二の企画は、十二月十七日から二十二日までの六日間、昨秋再開館したばかりの広島県立美術館で、本芸術学会の所属する会員作家三十一名による「10年の軌跡」と題する展覧会であり、とくに二十一日(土)には同名のシンポジウムがおこなわれた。作家は基本的に、各自が十年前の作品と現在の作品の二点を出品した。学会が成長してきた十年を、基本的に個人として活動してきた作家が自分の制作の現場において検証しようとするものであった。十年という物理的時間量は作家によって途方もなく長くもあれば、短くもある。その多様性が壁面にあるいは床面にひろがった。この企画は私たちが学会という呼称でともすれば陥りがちな理論偏重をただして、新しい一歩を踏み出す可能性が確実に示されたことを示している。

本芸術学会には、市民、学生、作家、美術館学芸員、画廊経営者、研究者、芸術支援というさまざまな立場の人がいる。その多様な層の多様な期待と意思にこたえるべく、今後さらなる想像力が必要であろう。会員数は約二百三十名、東北から九州までひろがっている。大会参加者は六百名をこえ、展覧会入場者は千五百名をこえた。この課題に私たちは真摯に応えなければならないであろう。

広島芸術学会は若い組織であり、実験的組織である。新しい企画はいつも冒険の要素をはらんでいる。その不安を学会内外の志を同じくする友人たちが吹き払ってくれた。美学・芸術学研究者の全国組織である美学会の西部会には全面的なバックアップを受け、研究発表を含めて、多くの研究者が来広され、大会を盛り上げていただいた。展覧会にはエネルギア・文化スポーツ財団（中国電力）の助成金をいただいた。本芸術学会が成長するために、私たちは開かれた組織であることを肝に銘じた。

新しい世紀のはじめに向けて、世は想像を絶するきしみを経験している。そうした状況を生きながら、私たちは相互に激励批判し合う創造と理論の工房として成長しつづけることを誓いたい。会員諸兄姉の今後一層の友情と支援をお願いする。

一九九七年四月